

原 著

## 当院における下部消化管穿孔手術症例の検討

稲垣大輔, 片山清文, 白石龍二, 田邊浩悌,  
谷和行, 大沢宏至, 安田章沢

平塚共済病院 外科

**要 旨:** 下部消化管穿孔は汎発性腹膜炎や敗血症性ショックを併発して重篤化するために、治療に難渋することがある。今回、下部消化管穿孔の臨床的特徴を明らかにするために、これまでに経験した症例を検討した。対象は1994年から2006年の期間に当院において手術を施行した下部消化管穿孔の31例で、患者背景、穿孔原因、部位、治療、術後経過、予後について、生存症例群と死亡症例群を比較検討した。全症例の平均年齢は68.2歳で、性別は男性21例、女性10例であった。死亡した4症例はすべて手術から30日以内であり、男性1例、女性3例であった。穿孔部位はS状結腸が14例と最も多かった。死亡症例群は全て左側大腸の穿孔症例であった。消化管穿孔の原因疾患は大腸憩室症が9例と最も多かった。生存症例群と死亡症例群の2群間を比較すると、穿孔の部位と原因、術前の腹膜刺激症状の有無、画像所見での腹腔内遊離ガス像の有無に関して有意差は認めなかった。ショック症状を認めた症例は予後不良であり、血液ガス分析のbase excess値は、生存症例群に比して死亡症例群で有意に低値であった。術中に便汁や便塊を含む腹水を認めた症例は予後不良であった。今回の結果から、base excess値、術前のショック症状の有無や術中の腹水の性状は、下部消化管穿孔症例の重症度を予測するための有用な指標となる可能性があると考えられた。

**Key words:** 下部消化管穿孔 (lower gastrointestinal tract perforation), 腹膜炎 (peritonitis), 敗血症性ショック (endotoxin shock)

---